

病からのチャレンジ



昨年、年の始め食事中に一瞬意識が無くなり、気が付いた時には床に寝かされていました。翌朝病院で調べたところコレステロール値、血圧もかなり高く血液の流れがつまり意識を無くしたようです。

津田沼から千駄木の事務所まで通勤してた私が、亀戸に引っ越し住まいと事務所も一緒、やはり運動不足とコレステロールの多い食事が原因だったようです。とかく昨今はカロリーの高い欧米化の食事が定着し大腸癌などを引き起こす原因となっています。やはり昔の日本人の食事、しかも腹八分目が身体には良い様です。しかし日常食の中でコレステロール値が上がるおいしい誘惑が何と多いことか！

その後、暫く病院通いが続き診察、同時に食事指導を妻と二人で受け妻は食事指導にそった物を用意してくれる様になり、自分に散歩を少なくとも1時間課するようにしました。だがその程度の運動量ではあまり改善が無く、午前中身体を動かして働ける仕事は無いものかと、見つけた仕事がマンションの管理員の職でした。

駅に近く40所帯のマンションを任せられ、始めの2、3ヵ月は仕事の段取りとを覚えるのに必死でした。ゴミ出し、1~12階の掃除、受付・点検巡回業務、住民とのトラブル処理、理事会、総会の準備業務、本社からの書類処理と午前中の4時間はあつという間に過ぎます。その甲斐あって半年で、だぶついていた身体が7キロの減量、病院の先生からも健康な数値に戻ってますよと言われるように成りました。

もしあの時、意識が戻らずそのままになっていたらと思うとゾッとします。その時を迎えたとしてもお念仏を称え、全てを阿弥陀如来におまかせして救われて行く世界がある、浄土真宗の教えを、この体験を通じ更に深く学んでゆきたいと思ひます。 福島秀昭 記

中原寺「壮年会報」記事募集について

壮年会報を、既に2回発刊致しましたが、読後感をお聞きしたいと思います。お気づきの点を遠慮なくおっしゃって下さい。今後の編集方針については、お寺さんの行事を中心として編集していますが、会員相互の理解を深めることが親睦のためには必要不可欠と思っています。前回国報の編集後記で提案しました会員一人一人の人生観・宗教観・中原寺との出会い等についてのエッセイ(600字~1,300字)に写真を2~3枚を添えて提供して頂ければ、大変助かります。 各人が満遍なく記事を投稿下さることを切望しています。

例えば各人の生誕月に応じて

- 1~3月生まれの方 3国会報に掲載(原稿締め切り2月25日)
4~6月生まれの方 6国会報に掲載(原稿締め切り5月25日)
7~9月生まれの方 9国会報に掲載(原稿締め切り8月25日)
10~12月生まれの方 12国会報に掲載(原稿締め切り11月25日)

と言った具合に協力して下さいれば幸甚と思っています。

提出先

- 河合照夫: tekawai325@ybb.ne.jp (郵送の場合 〒272-0834 市川市国分3-9-9)
高木史人: takagif@icnet.ne.jp (郵送の場合 〒272-0138 市川市南行徳4-4-5)
福島秀昭: ab-move@sky.plala.or.jp (郵送の場合 〒136-0072 江東区亀戸2-19-1)



壮年会だより

平成23年9月度中原寺仏教壮年会だより Vol.3



今年は、春は地震・津波、夏は猛暑、秋には台風と随局所集集中豪雨。大きな自然災害の襲来に見舞われた上に、菅政権の理念なき稚拙な政策遂行に翻弄されました。暦の上では立秋を過ぎ白露とはいえ、猛烈な暑さが続いています。暑さにもめげず皆様にはご健勝のことお慶び申し上げます。

昭和20年の敗戦以来66年の歳月が経過しました。この期間は、半世紀余ですが幾多の文明の興亡を見聞して来ました。ある意味では波乱万丈の日々であったと万感胸に迫る思いです。'80年代以降の日本は、上に立つ人が率先して我欲、物欲、金銭欲、出世欲を異常に膨らませ社会全体を墮落の極地に追いやりました。「先憂後楽」という言葉は、遠い昔の語り草となっています。

そんな中、先月末に誕生した野田内閣に淡い期待を抱く今日この頃です。詩人相田みつお氏の「泥鰌はどうあがいても泥鰌で、金魚にはなれない」を引用し、自らを「どじょう宰相」と呼称し、現在の状況を「混濁した泥水の渦中」と認識し、身を粉にして尽力することを宣言されました。彼は「財務大臣」に就任するまで国会議員として15年間津田沼駅前朝立演説を欠かさなかったとのことです。この忍耐強い地道な行動力と信念でもって漂流する日本丸の舵取りをして貰いたいと思っています。(合掌)

6月の行事 June

◆6月19日(日) 定例法座(壮年会法座併催)午後1時 於:本堂

通常の儀式を経て、住職より「釈尊と親鸞に見る社会性について」の法話を聴聞しました。内容は極めて示唆に富んだものでした。以下にその概要を記述します。

忙中閑あり。立ち止まるのが大事で、日頃見えない色々なものが見えて来ると言います。また、大事な人や身近な人との死別が、人生を考え直す大きなきっかけとなる。

お釈迦さんは、釈迦国の王子として生まれ、何不自由のない生活を送っていたが29歳の時に突然出家した。35歳の時に悟りを開き、仏陀となられた。以後80余歳で入滅されるまで、人々を救済する為に全国を行脚された。

一方、親鸞さんは、京都の中級公家の日野家に生まれたが、9歳の時に出家、得度し比叡山に入山、修行生活に入った。約20年間の比叡山での修行にも拘わらず、山を降り、洛中吉水で道場を開いて「専修念仏こそ救いの道」と説く法然の教えに共鳴し弟子入りした。

両者とも差別社会に苦しむ民衆を救済すべく修行し悟りを開いた。「人は生まれにして尊からず、その行いによって尊い」とし、四民平等を提唱。その思考は当時としては画期的な考え方で、従来上流階級だけに留まっていた宗教を一般大衆にまで広めた功労者でした。

承元の法難を契機に「愚禿親鸞」を自称。非僧非俗の生き方は、聖なる世界に失望し、俗の世界に埋没することを潔よしとしない親鸞さんの人間性を如実に物語っていると思います。真宗7高僧の一人道綽(どうしゃく)は「先に(浄土に)生まれむ者は後を導き、後に生まれむ者は先を訪ふ(尋ねる)」。誠に味わい深い言葉であります。浄土に先に達したものは、後に生まれたものを導き、後に生まれたものは先に生まれたものを尋ね、教えを乞い寄り添ってくれていることに感謝する。

「私たちは決して一人ではない」という自覚。そこに生きるちからが与えられる。



平成23年9月~11月壮年会行事

9月の行事 予定

- 9月3日(土) 午前11時 婦人会法座(敬老の集い)
9月18日(日) 午前10時 壮年会結成30周年記念 旧跡参拝旅行
9月20日(火)~26日(月) 秋季彼岸会
9月23日(金) 午後1時 彼岸会法要 「現代日本の医療文化と仏教文化」 講師:田畑正久氏(大分県医師)
※当日お手伝い頂ける方は午前12時までにお集りください。

10月の行事 予定

- 10月1日(土) 午後1時 婦人会法座 午後3時半 門信徒役員会
10月10日(月) 午前10時 入門式 阿弥陀如来の教えに帰依することを仏前に誓い門徒の一員となる

- 10月16日(日) 午後2時 壮年会法座
10月22日(土) 午後11時半 文化講演会(第23回) 講師:香山リカ氏(精神科医)
※当日お手伝い頂ける方は午前11時までにお集りください。

11月の行事 予定

- 11月5日(土) 午前10時 仏具磨き・清掃奉仕 午後1時半 婦人会法座・壮年会法座
11月20日(日) 午後6時 報恩講速夜法要 親鸞聖人のご命日にあたってその徳を讃える最も大切な法会
※当日お手伝い頂ける方は午後5時までにお集りください。
11月21日(月) 午前11時 報恩講日中法要 麻田 秀潤師(小千谷市極楽寺住職)
※当日お手伝い頂ける方は午前10時までにお集りください。

編集後記

6~8月の期間は、古来「水無月」「文月」「葉月」と呼ばれ若草、若葉燃える新緑の季節を経て、梅雨前線の停滞する梅雨時から真っ赤な太陽の降り注ぐ炎熱の夏と変化に富んだ季節です。最近の地球温暖化影響か梅雨時のゲリラ型の集中豪雨や梅雨明け直後の台風の襲来等温暖な日本の気象が亜熱帯の様相を呈しつつあり深く憂慮するものです。かかるなか、お寺の行事は多岐多彩に亘り記事の取捨選択に苦慮しましたが、今回の9国会報は、寺内での法座、講座、お説教を中心に纏めてみました。住職の「釈迦と親鸞との社会性」またケネス田中教授の「歓喜会に見る歓喜」のお話は、大変参考になりました。会報掲載記事の募集に関しても宜しくご協力のほどを伏してお願ひ申し上げます。(河合 照夫 記)

7月の行事 July

◆7月3日(日) 壮年会講座 / 午後3時～午後5時 懇談会 / 午後5時半～午後7時半

●歎異抄を読む(第3回)

第八段「念仏は行者のために非行非善なり」

わがはからひにて行ずるにあらざれば非行といふ、わがはからひにてつくる善にもあらざれば非善といふ。念仏は、念仏者にとつては、行でもなければ善でもない。自分のはからいで称えるものではないから、行でないという。自分のはからいでやる善ではないから、善でないという。ただ仏の力によって称えさせていただくもので、自分の力が加わっていないから、念仏者にとって念仏は行でもなく善でもないのだ。そう親鸞聖人は語られた。

第九段「念仏すれど踊躍歡喜の気持ち起こらず」

・念仏まふしてさふらへども踊躍歡喜のころおろそかにさふらふこと。

・いそぎ浄土へまひりたきころのさふらはぬこと。

唯円は疑問に思い、師に尋ねたのである。親鸞聖人は次のように語られたのであった。「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじ心にてありけり。」これを読んで、私がまず驚かされるのは、次の一句である。

「あのね、唯円房。わたしもまた同じことを疑問に思っていたのだよ。あなたもそうだったのだね。」「歎異抄」の魅力は親鸞聖人のこの言葉に集約されているのである。そう言われると、わたしたちは安心できる。

喜びを抑えて邪魔しているのが、あなたもご承知のように煩惱なんだ。人間には煩惱がある。煩惱があるからこそ、わたしたちは人間なんだ。だからこそ、わたしたち人間はお念仏を称えることができるのである。親鸞聖人は、そのことを語っておられるのだ。つまり、わたしたちに煩惱がなければわたしたちはお念仏を称えることができない。

煩惱こそ一逆説的ではあるが、お念仏を産み出す母体なのだ。だとすればお念仏は迷いつつ、苦しみつつ、涙を流しつつ称えるものではないか。踊躍歡喜を伴った念仏など、本来ないのである。

●講義後副住職の司会で 1. 長生きしたいか 2. 死は怖いのか? 3. 死生観についての事項を取り上げ議論した。

◆7月18日(月) 定例法座 午後1時 (海の記念日)

本堂にて「正信偈」読誦まで行い、住職の法話は開法会館で受講。暑さ回避の一助と思って「地獄と浄土」をテーマで講演。冒頭に毎月の法座を「定例」「常例」をどう呼称すべきかの問題提起がなされた。また法座の内容について役員会で検討中とのことでした。「地獄と浄土」に関してのお説教は下記の通りです。

インド人の死生観は、人間は生前の生き方により死後、六道に輪廻転生するとしている。その考え方は西域、中国を通じ日本に伝来した。特に中国の儒教、道教の思想と融合し日本では死後三途の川の渡河の難易度、閻魔大王の審判による地獄への篩い分け等の思想が定着した。

源信僧都の「往生要集」は地獄の様相を克明に描写し国民一般に地獄へ行くことの忌避や浄土往生を熱望させた。浄土はあるか?地獄はあるか?と質問されるが、浄土真宗大谷派の高僧金子太栄氏は「浄土はあるべきもの(あらねばならない)。地獄はあってはならない(作ってはならない)」。

誠に示唆に富んだ教えであります。浄土・地獄は死後の世界のことでなく、死後を通じて今をどう生きるかを自らに問う思考の所産である。皆で手を取り合い助け合う立場に立てば、この世は浄土であり、逆に自慢・自我に執着し他人と手を結ばない人には、この世は地獄である。この後質問時間になり、多々羅さんより「孟蘭盆会法要の由来」「日本のしきたりとして定着してきた歴史」「浄土真宗と孟蘭盆会との関係性」についての的を得た質問があり様々な意見が出され有意義なひと時を過ごした。

◆7月31日(日) 中原寺門信徒ファミリーパーティー 午後2時～5時40分

・第1部 安井文彦とオーシャンブリーズによる楽器演奏(午後2時～2時50分)

乙女座公演「親鸞聖人のご生涯(後編)」(午後3時～3時40分)

・第2部 模擬店・ゲーム・抽選会・盆踊り(午後3時40分～5時40分)

前日より「降りみ降らずみ」の曇天の中、当日は風もなく、かんかんの日照りでもない絶好の日和に恵まれた1日でした。大勢の老若男女の皆さんが参集し、バンド演奏に、観劇に、パズルでの酒食懇談に、またお盆ダンスにとまさに歡喜の喜びを



体感した1日でした。お寺が「葬式行事に」偏重し日常生活から遊離し、若い人々がお寺から離れていく状況は今後の寺のあり方を模索する大事な時期に直面しています。当中原寺は、毎月の定例法座での念仏唱和、住職・副住職の法話聴聞、研修後の酒食懇談、夏のファミリーパーティ、秋の文化講演会等バラエティーに富んだ催事を行い、お寺さんの門信徒教宣の努力が見られ、迷える私たち凡夫の希望の光となっています。当寺の今後のご隆盛を祈念しつつ。



8月の行事 August

◆8月14日 孟蘭盆会法要 午前10時～11時20分

法話:武蔵野大学教授・ケネス田中「歡喜会で味わう歡喜」

66年前の終戦記念日を翌日に控えた本日(14日)孟蘭盆会法要と「太平洋戦争戦没者追悼法要併催の法事が住職による「阿彌陀經」読誦の下、厳粛に行われました。私たちが今日あるのは、先祖の皆様とお国のために勇敢に戦った兵士の皆様のお陰とします。

またケネス田中先生の法話はお釈迦さんの「四法印」の教えを日常生活の中で実践し、心を変える(変心、回心)自己の修養を図ることの大切さを教えて下さいました。講話内容を下記に記述します。

- ・孟蘭盆会の由来:インド仏教でのサンスクリット語「ウランバナ」を漢字音写化したもの。「倒懸の苦」、「逆さ吊り」という意味で、目蓮(もくれん)という釈迦の十弟子がその母親(地獄に逆さ吊りの刑で苦しんでいる)を助けるために行った供養の儀式。浄土真宗では、歡喜会(かんぎえ)と言う。
- ・仏教には、喜びがある。オーム真理教のようなものは本当の宗教ではない。また「仏教は除災招福の道具ではありません」(住職)
- ・日常に仏教的な見方と行動をとると、我々の生活に何らかの形の歡喜の心が芽生える。「仏教的な見方と行動をとる」とは、お釈迦さん四つの教え(四法印)「一切皆苦」「諸法無我」「諸行無常」「涅槃寂靜」を日常の行動指針とすれば安穩な生活が送られる。われわれ「凡夫」の考えは、人生は常にスムーズ(順調)であるべきだ。全ては私のものである。そして常に不変である。そんな我儘(わがまま)な考えに立脚している。まさに「邪見驕慢」と言うほかない。
- ・おわりに、「四法印」の教え(田中先生流に言えば、「ちっちゃく考えるな」、「大きく考えよう!」)を日常生活において実践し自らを高め、歡喜に満ちた喜びを周囲に広げて行くことの大切さ、またご先祖様を喜ばす最大の供養は、私たちが今現在を恙なく、幸せに生きている姿をお盆で帰ってきた先祖の霊にお見せすることではないでしょうか。



◆8月20日・21日 中原寺子ども合宿(1泊2日) 男児13名、女児17名の30名が参加。

感話
シリーズ-3

【中原寺子ども合宿に参加して思う】



毎年、お寺の伝道推進の基幹行事としての1泊2日の子ども合宿も今年で16回を迎えます。参加された方の中には、親子2代の参加だったり、高校生になった合宿の修了生がスタッフとして参加していたりと、回を重ねるごとに参加人数・内容が充実してきている「中原寺子ども合宿」は、伝道推進行事として、これまでのよい取り組みが積み重ねられてきた成果だと感じました。

今回の参加者は幼稚園、保育園の年長さんから小学6年生までの男児13名、女児17名の30名。生き生きとした表情で皆元気でお寺に集合。まずは副住職の開会式の言葉、ご住職のご挨拶。皆静かに聞き入り、「三つのやくそく」を全員元気で唱和。市川マジッククラブの方の手品観賞、子どもたちは手品をされる方の仕草を不思議そうに、目を丸くして観賞している姿は可愛らしく、ある子は舞台下で寝転んで見ているのには手品の方もちょっぴりやりにくかったのではないのでしょうか。小さな子どもみんな喜んで最後まで静かに観賞しておりました。スタッフも一緒に観賞させていただき子どもたち同様、不思議にかられておりました。夕食の前に「えがおの湯」に行きましたが、ここでは他のお客さんに迷惑にならないようにと、同行のスタッフの方が入浴そっこのけで周りに気を使っている様子が微笑ましかったです。そして夕食のパーベキュー、入浴しておなが減ったからでしょうか、大勢でいただいたからでしょうか、美味しくそうにお肉も野菜もみんなの食べっぷりのいいこと、あっと言う間に平らげる元気一杯の様子は頼もしい限りでした。食後はご住職によるスライドを使った原爆のお話も大きい子ども小さい子どもみんな食い入るように観賞しておりましたが、被爆された方のスライド写真をいったいどんな想いで鑑賞していたのでしょうか。あとでゆっくり感想を聞いてみたかったです。その後、就寝となったのですがショックで眠れない子が出るかとも思いましたが、大勢の友達と寝られる喜びが勝ったようです。みんなぐっすりでした。

2日目は、ラジオ体操、掃除、お朝事につづき、恒例の座禅。例年はセミの鳴き声とともに心を落ち着けるのですが、今年は雨音ともに30分ほど取り込みました。朝食後の工作は、割り箸で作る「輪ゴム鉄砲」、灯籠絵付け、プラスチック板で作るキーホルダー作りと盛りだくさん。予定時間をかなりオーバーしての力作の出来ばえは上々でした。そして、その影響をまともに受けたお茶会、歌の練習時間もわずかだったにもかかわらず、ご父兄の前での発表では大声で、上手に歌えたのには感心しました。最後の閉会式ではみんな元気に、修了証授与では返事も良く礼儀正しく、合宿の成果をひしと感じました。

このように積み重ねられてきた「中原寺子ども合宿」の伝統が引き継がれるよう、これまでの取り組みを継続していかなくてはという気持ちと共に、その一員として合宿に参加させていただけることへのご縁を感謝せずにはいられませんでした。(合掌)



村田太喜夫/片山晴司 記